

# 物の見方の二重性と言語表現

Duality of the Cognition of Thing Impacting Language Expressions

東京外国語大学総合国際学研究院教授（情報工学）

佐野 洋

総合電機メーカーを経て、1996年から東京外国語大学に在職。東京外国語大学教授。日本語の分析を通じ英語の比較対照に興味を持つ。現在、学長特別補佐として市民講座や募金等を担当している。

✉ sano@tufs.ac.jp

## 1 モノと動き

### 1.1 感覚、知覚と表象

色は物理的実在ではなく、人間の感覚器官と脳で創られた概念である。橋本（[1]：12頁）は、例えを使い、『赤という色は、波長がおおよそ七〇〇ナノメートル（ナノ＝一〇億分の一）の電磁波が、人間の網膜中の視細胞を刺激し、それを脳が感じ取る「現象」である。』と説明する。対照言語学研究は、基本的な色彩語彙について次の階層を明らかにしている（[2]：55頁）。

白-黒 > 赤 > 緑-黄 > 青 > 茶

文化論的な議論を経た言語学の歴史を踏まえ、ウェイリー（[2]：56頁）は、『世界の言語の色彩語彙が一定の階層に従って現れるという事実は、ひとえに視覚系のニューロンのはたらきによる帰結なのである。』との述べている。

こうした色彩語彙の存在は、ニューロンの働き、つまりヒトという生物が視覚系の器官と神経網から創り上げた人間（主観）的な脳内イメージに基づいて創られた存在世界である。1930年代初め、ユスキュル（[3]）は、環世界という概念で、生物に個々の存在世界があることを示している。そして、色彩語彙の存在につながる表象化の理由を、『一グループの知覚細胞の知覚記号は、その知覚器官の外で、いや動物の体の外で、集まって一つになり、そのまとまりが動物主体の外にある客体の特性になる。』（[3]：17頁）と説明する。つまり、ヒトの

環世界における「赤（色）」は、波長がおおよそ700ナノメートルの電磁波に対する特性なのである。

今では、知覚記号の詳細は、脳内ニューロンの部位や神経信号や伝達の有り様（[4]：8～10頁）まで密画化（[5]：69頁）されていて、光を電気信号に変換する網膜の視細胞の存在や、波長の違いによって、その活性化の程度が違うことも理解されている（[6]：176頁）。なお、視覚世界を創る視覚視野は脳の後頭部に位置し、第1次～第5次までであり、第4次視覚野は色や形の視覚を、第5次視覚野は動きの視覚を扱うという<sup>1</sup>。物理存在のない色や臭い、体感する温度や湿度などに対する生理的反応の仕方は、生き物ごとに違うとは言え、おそらく不可抗力的に生体内（脳内）に心像（感覚情報）が作られる。

同様に音もその物理存在はない。周波数分布やパワー分布が違う時間幅を変化させた合成波形の特徴が、いわゆる音素の存在つながる表象を脳内に作り出す。但し、視覚と違い、聴覚器官の受容能力は同じでも聴覚野において後天的に選択的受容が行われている。音と音声区分されるし（カテゴリー知覚）、ことばによって音素集合が違うことから分かる（[7]：53～55頁）。それに加えて、呼吸器に通じる上気道とその中の運動器官（声帯や舌）を通じて、似た感じの音を作り出すことができる。作り出された刺激、これはユスキュル（[3]：16頁）が作用記号と呼んだものである。

このように音韻論でいう音素とは、おそらく個体間で

1 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A6%96%E8%A6%9A%E9%87%8E>（アクセス：2018年8月12日）

の心像の相互理解の観点から、恣意的に結びつけられたものといえる。この心像は、時間区分を持つから出来事に付与する特性で、その特性は即時の再現性があるし、受容の表象と産出の表象が共通化されている。なお、顔の表情、触手話や手話でも視覚を通じて得た知覚形態でも似た表象を作り出すことができる（[8]：159～167頁）。

## 1.2 形の知覚とモノ

物理的に形を持って存在してはいても、ヒトはその物体の形を正確に捉えているわけではない（[6]：93～103頁）。眼球の網膜上には2次元画像が映っている。3次元画像を構築しているのは脳である（[9]）。ユスクュル（[3]：46頁）は、大人と子供の視空間の違いを指摘したが、ホフマン（[6]）は、ヒトが互いに共通する視覚世界を造り上げる「視覚的情報処理の法則」が生得的にあるとする。2次元の画像がもつ無数の解釈の可能性を制限し、奥行きのある3次元画像を創り出し、対称性とか単純性などの性質を充たす形（の群れ）からなる視覚世界を構築するという。例えば、脳の運動認識に関わる部位にダメージを受けると動きを見ることができなくなるという（[9]：61頁）。外界は見えているのではなく、時空間分解能に制約された器官を通じて、見たいものを見ている。『あなたはそこにあるものを知覚しているのではない。脳が作り出したものを知覚しているのだ。』（[9]：56頁）

## 1.3 空間を通る変化が動き

生物にとって『瞬間は、分割できない最小の時間の器である。（[3]：53頁）』一方、物理的な時空間は単一の不変ブロックとなる（[10]：235頁から引用した図1を参照）。

瞬間毎のスナップショットが、物理的に存在する空間全体にまたがり単一のブロックを構成する。図1では個々の時間（現在）のスナップショットを（本来は空間

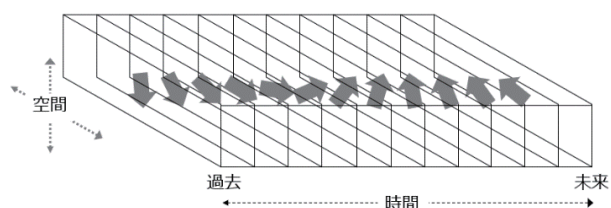


図1 時空間

なので三次元だが）二次元で表現している。『われわれが「瞬間」と呼ぶものは、時空を切った一片のスライスであって、こうしたスライスの内容がたがいに異なるとき、われわれはそれを空間を通る変化すなわち運動と呼ぶ。』（[10]：236頁）と説明する。

物理的な時空のスライスはプランク長（ $1.616 \times 10^{-35} \text{m}$ ）で決まる。生き物としてのヒトの知覚器官（目）の時間分解能は、約50ms～100ms程度（10～20/秒）である。これが、ヒトがスナップショットを動きがあると認識可能な時間長（時間の器）だ。この時間長を使ってヒトは、外界を知覚して解る変化を時間次元方向に区分して動きの心像を作る。

ところで、ヒトは0.1秒ほどでまぶたを閉じることができる。辛うじて認識可能な時間長である。蝶の羽ばたきも同程度らしいが、蜂はその10分の1以下ほどだそうである。経験から分かるように蜂の羽の個別移動は見えないが、羽ばたき（動きの心像）はある。

## 1.4 記号過程

ある波長の電磁波の眼球を通じた受容（心像）から、記号表示された色彩語彙に至る道筋は長い。ヤーデンフォッシュ（[7]：84頁）は、動物が外界の姿を表象する過程を、感覚と知覚そして表象の関係から説く。表象とは思考の対象で『「内面」の表象とは脳にあって物体そのものの代わりに用いられるもの』（[7]：39頁）という。そして、心像を持続させる認知能力や因果性（原因と結果）の理解能力を前提とした想像する能力から創り出される分離型表象が、思考という高度な認知的機能の実現に必要なとする（[7]：56～65頁）。

イトカワ（[11]：22頁）は『人類が任意に、あるものを他のものの代わりにし得る過程』を記号過程と呼んでいる。この記号過程に沿うと記号表示された表象は外形化された思考表現である。そうすると色彩語彙は、物体そのものの代わりに記号表示された思考のための記号の一つである。相互の同意によって情報伝達が可能になる。そうしたわけで、コミュニティが長い時間を経て同意し作り上げた、外形化された表象群の体系が言語である（[11]：26頁）。

動きを表す分離型表象が記号過程を経て外形化されて表現となり、言語公共的な扱いを受け体系化される。これらの記号表示を言語学では動詞（や用言）と呼ぶのだろう。

## 2 モノの捉え方の二重性

### 2.1 動きと表象

ユクスキュル ([3]: 69 頁) は『物体の形は本来のしかるべき知覚標識であるが、運動は単なる付随的現象として、二次的知覚標識として、たまたま加わるのだと考えることに慣れている。』としたが、80 年近く経て、ホフマンは、おもに形の知覚につながる 35 ある生得的な視覚解釈の中に、4 つの動きの解釈 ([6]: 193 頁~204 頁) と、3 次元の剛体の動きの解釈を 2 つ挙げている ([6]: 209 頁、213 頁)。また質変化の解釈が 2 つある ([6]: 155 頁)。

剛体の動きや質変化は物理モデルがある。剛体は、力の作用によって変形しない物体であるし、質変化は不可逆的な物体の性質変化である (弾性体のような物体の見方)。これに似て、本稿の提案は、動きをモノの位置変化に限定するのではなく、時間の経過が動きであると考え、モノの捉え方の違いに対応する心像が在ること、そしてそれら心像の表象化過程を考察することで動きの特徴を見出そうとするのである。

### 2.2 モノの変化前と変化後

時間の経過—モノの変化が動きであると考え。変化の認識には、モノの状態の知覚だけでなく、その様子の記憶 (質感を含むモノ形状を記憶し、参照すること) が必要である。そして、モノの変化前と変化後の様子を比較できなければならない (二状態の弁別)。さらに二状態の間の関連性 (因果性) の理解と推論能力が必要である。この関連性は、生き物の生存に役立つ関連性と考えることができる。こうしてモノの状態変化を時間の経過 (動き) として表象化する。

この前提から考えると、前節までに見てきたようにモノの状態の変化の認識手段には二つある。(1)位置が変化する場合と、(2)質が変化する場合である。いずれも二状態の弁別ができ、そして二状態間の関連性を想定することができる。

(1)は、モノの外形が同じであることを条件として、位置が変化することで理解され得る。この場合の捉え方のモノを「外形存在」という。外形存在は、位置変化するモノであることを担保する。力のもとで変形しないモノで、物体を理想化したモデルとしての剛体と同じよう

な考え方である。

(2)は、モノの機能が同じであることを条件として、質が変化することで理解され得る。この場合の捉え方のモノを「機能存在」という。機能存在は、質変化するモノであることを保証する。物体を弾性視点で呼称する弾性体のような考え方である。歪はモノの属性や性質として見立てることができる。

### 2.3 外形存在と位置変化

外形を変えずに位置が変化する (図 2)。始点と終点が存在し、動きの経路に方向性 (多様性) がある。

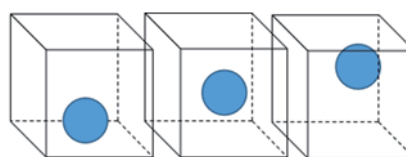


図 2 モノの外形存在と位置変化

モノを外形存在物として捉えると位置変化によって動き (時間経過) を表すことができる。このイメージ図からも理解されるように、動きの間、外形は変化しないので、典型的には、始点と終点、および経路の概念が生じる。

始点と終点の間の距離とスライスの数 (時間間隔) に応じて時間経過 (時間長) の感覚が意識される。同時に結果状態の概念も生まれる。終点位置を変えたり経路を複雑にしたりすると時間経過長が変化する。

時間方向の軸を無視し、スライスを縮退させることで空間を重ね合わせて、移動距離や移動の速さで時間経過を代替すると一つの想像空間内で位置変化を表すことができる<sup>2</sup>。これをモノの単一空間存在という。例えば、図 3 である。一つの空間内に同じモノが存在できるのは時間経過を無視しているからである。モノの位置変化の有様の違いに応じて動きや時間経過の多様性が生じる。

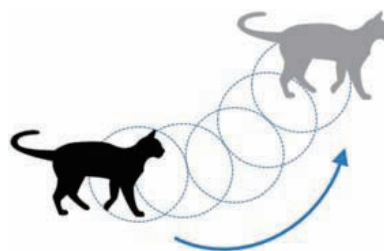


図 3 “go around”

2 現代では、バレットタイムとかタイムスライスという映像技術を使って撮影された映像で想像を視覚化できる。

図2のイメージは幾何学的な次元を用いているが他の感覚と交差する認識次元である。経路の様態も複雑だ。例えば、人の腕は、肩から手首にかけて計7つの動きの自由度があるという。産業用ロボットは、ヒトの動作を模擬する装置だが、最新の産業（溶接）ロボットは7軸（7自由度）を持つ<sup>3</sup>。触感との関わりについて、1700年初め、ジョージ・パークリーは視覚概念と触覚概念が結び付いていることを主張した（[12]：72頁）。ユクスキルは、（生物学的には）視空間と触空間が競合することを指摘している（[3]：40頁）。事実、自由度の大きい手の運動を使うためかフライのボールを追う外野手は変に曲がった経路を走る（[9]：62頁）。

## 2.4 機能存在と質変化

機能を変えずに質が変化する（図4）。機能存在には、もとの性質に戻らなくなる降伏点がある。モノを機能存在として捉えると質変化によって動き（時間経過）を表すことができる。質変化後の結果状態として認識する。

図4のイメージ化の基礎である物質の変形（歪－属性や性質）は、力の大きさに依存するので直接的に時間経過を示さないが、単位時間当たりの力を想起することで時間経過に対応させることができる。あるいは力の掛け具合によって質変化までの時間が変わるので、時間経過長を柔軟に伸縮させることができる。

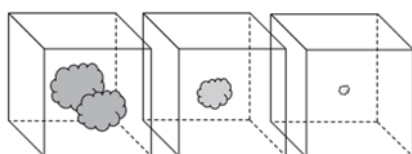


図4 モノの機能存在と質変化

図4イメージが示すように、結果状態（降伏点を超えて質変化した状態）を動きとして表象する。イメージ図は質として外形が変化することを表している。外形そのものが機能維持に不可欠である場合は、降伏点は機能の喪失点でもある。

モノとその質の組み合わせによって降伏点までのスライス数（時間間隔）は様々である。つまり時間方向の軸を無視することは難しい<sup>4</sup>。そのため状態変化では、降伏

点に達した状態変化を一つの空間で表し、降伏点に至る動き（時間経過）を別の時間的に先行する空間で表す。これを複空間存在という。先行する空間における動き（時間経過）は多様である。

何を視点として質変化が生じ、不可逆的な点を超えて結果状態に至ったのかの経過は、一般的な知識による推論・推察によって決まる。例えば図5である。「シャツが仕上がる」に先行する空間には、イメージ図にあるように洗濯機を用いた動きもあるが、それだけに限定されない。洗い桶で洗った場合も考えられる。クリーニング店にシャツを持ち込み、そして持ち出す動きもあるはずだ。



図5 「シャツが仕上がる」

## 3 捉え方の枠と表現

### 3.1 モノの存在空間と認識

モノの捉え方とそれに対応する変化の認識の仕方に、2種類あることを指摘した（図6、図7）。いずれも動き（時間経過）を理解するためのモノの捉え方である。



図6 単一空間存在



図7 複空間存在

単一空間存在は、具体的な動きで直接的に時間経過を表す。空間の大きさ（幅）は時間長である。この時間長は心理的な経験現在の感覚—5秒程度（[13]：36頁）を中心とした時間幅である。

複空間存在は、結果状態からの推察の動きによって間接的に時間経過を表す。図7の右のボックスが状態（降伏点を超えて質変化した）状態を表す。時間長は僅少で、知覚的に瞬間、あるいは認識的に変化が識別できる程の時間幅と考えてよい。

3 <https://www.yaskawa.co.jp/newsrelease/product/11501>

4 一定の時間間隔で定点の写真を撮るインターバル撮影によって記録した映像を、早送り再生して視覚化できる。

位置変化を起こす力と、質変化を起こす力は性質が違う。位置変化を引き起こす力は外在的か身体に由来するような知覚的で具体的であることを基本とする。それに対して質変化に関わる力は、瞬間的に変化する具体的な力を含み、内在的で認知的であると考えられ、多様な力が想起される。

### 3.2 単一空間存在と事象

外形存在と位置変化の動きの世界は、一つの空間に同じモノが存在すると仮定する（あるいは取り決める）ことで、単一空間存在の表現世界を創り出すことができる。モノの移動表現が選好され、方向性と連続性が動きの表象の特徴となる。事態の表現は、始点と終点を持つ経路表現が選好される。因果性を「近接性」と「時間の先後」で理解する（[14]：35～44頁）とすれば、経験する時間長を基軸にして「こうなるはずだ」という始点から終点に向かう時間順行の具体的な動きのあり様を表す。

観念的にモノが自ら位置を変化する移動-内的移動が派生する。具体的な動きの内的移動は「こうなる」に至らせる意志や目的と結びつき、意図的な動作や行為を表す。

#### 3.2.1 対象の表現例（英語）

英語は、モノの捉え方として外形存在を選好する。人称詞は外形存在であり、意味的に意志を内在する。不定冠詞は、モノが外形を有し、モノの内部の性質に言及せずに不可侵的に取り扱うこと宣言する標識である。複数形態は外形存在の集合であることを示す。

外形存在を選好するので、実在しないモノに対してあたかもモノであるように有界性を明示しようとする。英語の名詞（句）の有界性を決定する判断基準を、先行研究を引用して挙げる（[15]：20頁）。

- an area of（閉領域）
- a period of（区間、時間幅）
- an event/occasion of（包括的な事態）
- an instance of
- a kind/type of（属性集合の事例化）
- a unit/serving of（動きの事例化）

表現事例は、[15]に詳しい。

#### 3.2.2 事態の表現

経路表現の特徴は、単一空間表現のイメージ図からもわかるように包括的な事態表現である。典型的に動きは、視点と終点があって、経験現在（[16]、[17]）の時間経過が表現される。つまり「包括的な事態表現」が動詞としての意味を担いやすい。

私たちには2つの時間経過の認識がある（[1]、[16]、[18]、[19]）。経験する現在の時間経過と創造した時間経過である。図8は経験する現在の事態の表現である。動作や行為が継続している様を表す。なお、図中の点線は表現されないが事態の意味に含意されていることを示す。



図8 経験現在事態



図9 創造事態

図9は創造時間の事態の表現である。言語学では、事態と言われるもので、包括的な事態表現の雛形である。時間経過（時間軸）を含む知覚空間を基礎に動詞の意味を創る。この事態表現は、向きと始まりと終わり（完結性）を示す。包括的な事態を表すので、いわゆるテンス指向の表現が発達する。一つの空間内で動きが完結するので、具体的な動きの表現を好み、したがって、外形判断（“look like”, appear, seem）と人の判断（believe, consider）のように知覚表現と認識表現を分ける傾向にある。



図10 始点焦点



図11 終点焦点

事態の類型として始点と終点に焦点をあてた場合のイメージ図を図10と図11に示す。ちなみに英語の過去形は図9で示すような意味を持つ事態である。

### 3.3 複空間存在と事象

機能存在と質変化の表現世界は、状態表現を一つの空間で表し、質変化に至った過程（先行する空間）を推察することで、複空間の表現世界を創り出すことができる。モノの状態表現が選好され、降伏点と塑性変形が特徴である。動き（表象）は、状態性の表現に結びつけられることが多く、想像する時間長を基軸にして「こうなるべ

きだ」という結果状態から性質変化の始まりを推察する時間逆行の動きのあり様を表す。

観念的に話し手の認識を経て、モノ自らが質を変える状態変化—内的変化が派生する。推察した性質の内的変化は「こうなる」と信じる共感と結びつき、不可避的な動作や行為を表す。

### 3.3.1 対象の表現例（日本語）

日本語は、機能存在を選好してモノを捉えようとする。人称詞はなく、役割語が多い。類別詞はモノが固有の外形を持つことを表す形態（個、人、匹など）であるが、意味的には機能を優先する。外形的な存在を表す表現として「というもの」や「ということ」がある。

機能存在を選好するので関係性が明示されやすい。体言（名詞）の関係性を決定する判断基準を挙げる。

- 視点の推定（性質破断を予測する）
- 内包の参照（機能を制約する）
- 先後関係（相対的な時間関係）
- 二次元の距離関係（遠中近、領域内外と共領域）
- 対比関係（等距離、並行性）
- 機能・働き（推移的な事態）

なお上記は、モノの機能存在からの推察によるもので、言語現実を分類したものではない。具体事例をもとに詳細を詰めたい。

### 3.3.2 事態の表現

状態表現の特徴は、複空間表現のイメージ図（図7）にあるように2つの空間を連結させて事態を表現する。図の右側の結果状態（降伏点を超えて質変化した状態）が表現化される。典型的には、時間経過（時間軸）を含まない状態性の強い認識空間を基礎に用言の意味を創る。動きを表すにしても瞬間的な変化になることが予想できる。

結果状態に至る経過を、時間的に先行する（左側に示す）空間で表す。結果状態より先に起きたことを表す部分である。先行する空間を含めると包括的な出来事として表すことができる。原因は結果の作り手だが、一つの結果に唯一の原因が先じる訳ではない。したがって左側の空間に応じる表現は抑制される傾向がある（省略される）。もちろん恒常的關係が想起されることもあるが、それはそれで原因を表現する必然性がない（言語運用で



図12 経験現在事態

冗長表現は避けるという原則は一般的だろう）。

この結果、複空間表現では、質変化の視点を内在するような変化的な動き、つまり「推移的な事態表現」が動詞（用言）としての意味を担うことが多いと結論できる。推移的な事態を表すので、図9で表象できるようなテンス志向の動きの表現ではなく、いわゆるアスペクト指向の表現が発達する。

仮に意図的な質変化が可能であるにしても時間を要することが多いので、話し手の認識を経る表現が好まれる。創造事態は経験現在事態と同じである。そうしたことから、「ようだ、みたいだ」の語義から分かるように知覚表現と認識表現の区別をしない傾向にある。



図13 始点焦点



図14 終点焦点

事態の類型として始点と終点に焦点をあてた場合のイメージを図13と図14に示す。日本語の用言のいわゆるタ形は図14である。経験現在の時間で用いると完了を意味し、創造時間で用いると過去の事態を意味する。ただ、過去の事態であるにも関わらず始点と継続部分のあり様は不明であることが特徴で、複空間表現が時間経過を柔軟に伸縮させることに整合している。例えば、「食べた」は完了も過去も表すことができる。“ate”とは事態の時間経過の捉え方が異なるのである。

## 3.4 表現の特徴

### 3.4.1 位置変化表現の他動的な世界

位置変化の表現はモノが力を受けて移動することを表す。知覚的で観察に基づく動きの把握の仕方である。力が外在するとき、表現は自動的である。力を及ぼす（別の）モノが空間内にあるとき、表現は他動的である。ただ、力の源泉は明示したほうが動き（時間経過）が理解しやすいので、位置変化の表現世界では他動的な表現が好まれる。

力を及ぼす別のモノを自己とするのは容易であるが（いわゆる一人称主語）、知覚認識する他者に対しては自

己同一性を想定することで非一人称の行為者主語を作ることができる。ただ、自らの意思は誰とも共有できないから、自ずとできること（力の作用範囲）の制限が生まれる。この制約は表現に顕れ、例えば、言語学で有生性の階層として知られている（[2]：173頁）。

力を及ぼすモノと、力を受けて移動するモノが同一であると想像することができる。この場合、移動や経路が不問になるほど縮小すると見做すことができ、状態表現を作る。いわゆる再帰代名詞を使った表現が相当する。

### 3.4.2 状態変化表現の自動的世界

状態変化の表現はモノが力を受けて性質が変わることを表す。知覚的で観察できる質変化は少ない。そのため一般知識や常識知識から時間経過の判断するような認識を経た動きの把握の仕方になる。質変化の表現世界は、典型的には、時間経過を含まない状態性の強い認識空間なので、表現は自動的である。質変化の表現世界では自動的な表現が好まれる。

力を及ぼす別のモノの存在は許されず、質変化するモノに力が内在する。例えば「なる」は、モノが機能を変えずに外形や性質が不可逆的に変化することをいう。「医者になる」では、対象がその外形を変えないが、「ばらばらになる」、「赤くなる」、「可笑しくなる」、「おかしくなる」、「話しにならない」のように視点の違いで、結果状態が異なる様々な状態を表現する。

質変化の視点を含む内的変化の表現は、「～が～になる」が典型例であるが、例えば「木が植わる。」「花が咲く。」「目が潤む。」「皿が売れる。」などである。

結果状態より先に起きたことを表す部分を使って他動的な表現ができる。ただ、モノを機能存在として捉えているので、力の意味合いと、したがって力を受ける意味合いが違ふ。外形存在が力を受けるとき、そのモノを被動対象というとなれば、機能存在が力を受けるとき、そのモノは付随対象ということができる。

付随対象とは、力を受けているときに外形維持（性質不可侵）の圧力がなく、多面的にモノの意味を表すことができる対象である。例えば、「道を歩く。」「成功を祈る。」「人生を生きる。」「(よい)成績を褒める。」などである。このことは、いわゆる関係節構文（日本語の連体修飾節）の分析にも影響する。

### 3.4.3 項（結合価）構造

動きはモノによって創り出される。モノの組み合わせが動き（時間経過）の枠を作る。それらの枠を表象化し、表象に言語公共的な意味を与えるのである。このように動詞や用言に動きの意味があるのではなく、枠に意味がある。枠はモノの組み合わせなのだから動詞や用言には、いわゆる項があるように見える。

いわゆる動詞の項構造（あるいは結合価構造）の解釈に2つあることが分る。外形存在のモノが項に現れるとき、それらモノは機能を表すようになる。機能存在のモノを項に用いると、それらのモノは制限された機能を表すようになる。

孤立語傾向の強い英語では、動詞の項は、動詞との位置関係と前置詞によるマークによって指定される。例えば、「The motor drives the compressor.」（「コンプレッサーはモータで動く。」）のように、主語位置にあるmotorは作用主体としての機能が付与されている。

日本語は膠着語傾向が強い。機能制限のため語に後続する形態素を使う。例えば「モータがコンプレッサーを駆動する。」のように、モータは作用者として機能が制限されている。

### 3.4.4 対象の修飾

日本語の体言の修飾は文法的な構造の制限が緩いと言われている。日本語の連体修飾表現を英語に翻訳するといろいろな表現に対応する（[20]）。

関係節とはモノの捉え方が外形存在であることを前提に発達したのではないか。日本語の体言は機能存在を表す。機能存在のモノの動きは、外形存在を前提とする位置変化の場合の動きと違ふ。動き（時間経過）を引き起こす力の性質が違ふので、動詞が表す事態と用言が表す事態は違ふ。そういうわけだから、出来事表現を用いて制限する対象の修飾の性質は必然的に異なるはずだ。文法概念の適用の妥当性を再考する必要があるだろう。

## 4 おわりに

### 4.1 思考の類型

本稿では、モノの捉え方の二重性を指摘し、動きの表象を創り出していることを示した。例えば、「飛ぶ」と「羽ばたく」、「叩く」と「壊す」、「押す」と「潰す」などは、



捉え方の境界にあるモノが使い分けられた動きの表象だろう。この二重性は、当然ながらモノへ加える力の考え方にも影響を及ぼし、それが言語の特徴にも顕れる。

著者は以前、韓国出身の留学生から、日本語の複合動詞「生まれ育つ」の動き（時間の経過）について尋ねられたことがある。その留学生の母語からすると、なんとも動きとして想像できないので困惑するという。成年となった質変化（集団社会生活を営むヒトとしての認知的な塑性変化点）からその変化の始まりを推測すると、生まれて物心がついたときまで（想像）時間を逆行させて解釈すればよいのであるが、これは日本語の特徴ではなく、関係性（因果性）理解のための思考方法の類型だろう。動詞の意味が違ふと考えるより、思考類型があつて、そこから記号体系を構築した結果、違いが生じたと考えたほうが合理的である。

## 4.2 残された課題

[19] と [21] では、時間の捉え方の二重性と言語の表現の関わりについて報告した。本稿は、モノの捉え方の二重性とことばの表現の関わりを述べた。受容と表出について、もう一つの二重性がある。外界を知覚したり他者へ表象を表出したりする際に、ヒトの情動（[4]：30～33頁）が、受容と反応に関わる心的態度の二重性（[22]）に影響を与えている。イトカワ（[11]：71～74頁）がいう語の感化的意味と情動的意味の違いである。

例えば、評価基準に照らして優れて水準を超えると“good”であり（情報報告）、個人の判断で水準を超えていれば“nice”である（感情報告）。「よい、いい」は、「一番最初」と同じように情報報告と感情報告が重なっている。

こうした感情的な反応—情動発現も、動き（時間経過）を質変化と見做すことにも関わる。皮膚への刺激や味覚、視覚などすべての感覚情報は扁桃体と海馬体に入力される（[4]：16頁）。そして、小野（[4]：120頁）によれば『過去の体験や記憶に基づき、これら感覚刺激が自分にとってどのような意味を持つのか、報酬（有益＝快情動）か嫌悪刺激（有害＝不快情動）かなどを学習し、生物学的価値評価を行っている。』という。これは蛇への恐怖感や顔の動き（表情）への感情反応など生得的に質変化を認識する。

これらの考察から、外界の表象のあり様には、少なくとも2（時間把握の二重性）×2（モノの捉え方の二重性）×2（心的態度の二重性）通りの基本的な多様性がある。心的態度の二重性と言語表現については稿を改めて報告したい。

ところで、一般財団法人日本特許情報機構（Japio）・ライティング分科会では、ビジネス文書の形式表現と内容表現の明晰化のため、文書の書き方の調査と研究を行っている。ビジネスに携わる人に求められる表現技法を整理し、ライティング・マニュアルの形式で纏めようとしている。

いうまでもなく文の基幹部分は動詞（や用言）である。そして、動詞や用言は動きを表す分離型表象が記号過程を経て外形化され、言語公共的な扱いを受け体系化された表現である。本稿でみたようにモノの捉え方とその組み合わせで決まる枠が動きの表象であり、モノの捉え方—名詞や体言の表現と密接にかかわる。モノの捉え方の観点からも表現技法を整理し直し、再検討することになっている。

## 参考文献

- [1] 橋本淳一郎、時間はどこで生まれるのか、集英社新書、2006.
- [2] リンゼイ J・ウェイリー著 大堀壽夫、他訳、言語類型論入門 言語の普遍性と多様性、岩波書店、2006.
- [3] ユクスキュル／クリサート著 日高敏高・羽田節子訳、生物から見た世界、岩波書店、2005.
- [4] 小野武年、脳と情動 —ニューロンから行動まで—、朝倉書店、2012.
- [5] 大森壮蔵、知の構築とその呪縛、ちくま文芸文庫：筑摩書房、1994.
- [6] ドナルド・D. ホフマン 原淳子・望月弘子訳、視覚の文法 脳が物を見る法則、紀伊国屋書店、2003.
- [7] ベーデル・ヤーデンホッシュ著 井上逸平訳、ヒトはいかにして知恵者になったのか—思考の進化論—、研究社、2005.
- [8] 久保田競編著 虫明元・宮井一郎共著、学習と脳器用さを獲得する脳、サイエンス社、2007.





- [9] ディヴィッド・イーグルマン 太田直子訳、あなたの知らない脳、ハヤカワ書房、2016.
- [10] デイヴィット・ドイッチェ著 林一訳、世界の究極理論は存在するか 多宇宙論から見た生命、進化、時間、朝日新聞社、1999.
- [11] S・I・イトカワ 大久保忠利訳、思考と行動における言語、原書第四版：岩波書店、1985.
- [12] 一ノ瀬正樹、英米哲学入門、ちくま新著：筑摩書房、2018.
- [13] 松田文子他、心理的時間—その広くて深いなぞ、北大路書房、1996.
- [14] スティーブン・マンフォード、ラニ・リル・アンコム著、塩野直之 谷川卓訳、哲学がわかる因果性、岩波書店、2017.
- [15] 石田秀雄、わかりやすい英語冠詞講義、大修館書店、2002.
- [16] 大森荘蔵、時は流れず、青土社、1996.
- [17] 佐野洋 石田智明、“時間経過認識の二重性と文法”、電子情報通信学会、思考と言語研究会技報、2018.
- [18] 坂部恵、かたり—物語の文法、ちくま学芸文庫、2008.
- [19] 佐野洋、“時間経過の見方の二重性と言語表現”、Japio YEAR BOOK 2017、日本特許情報機構、2017.
- [20] 猪野真理枝、佐野洋、馬場彰監修、英作文なんかこわくないII 連体修飾編、東京外国語大学出版会、2014.
- [21] 佐野洋、“モノの見方と時間の解釈（動きの表現）”、電子情報通信学会、思考と言語研究会技報、2018.
- [22] 山祐嗣、“二重過程理論—進化的に新しいシステムは古いシステムからの出力を修正しているのか?”、日本認知科学会 第34回大会、日本認知科学会、2017.



5

産業日本語関連

